

## Contents

\*\*\*\*\*

特集：共和党予備選とロムニー研究序説	1p
<先月の”The New York Times 紙から>	
”At Harvard, a Master’s in Problem Solving” 「ハーバードの問題解決屋」	8p
<From the Editor> 若き日のロムニー	9p

\*\*\*\*\*

### 特集：共和党予備選とロムニー研究序説

明けましておめでとうございます。と言っても、あまりめでたい感じがしない新年で、「何か元気が出るような明るい話はありませんか」という会話をよく耳にします。景気の先行きは不透明で、各国の政治は迷走気味で、選挙が多く予定されているわりには、新しいスターも少ないという現状では、無理からぬことかもしれません。

年明け早々、米国ではアイオワ州党員集会、ニューハンプシャー州予備選挙が行なわれ、いずれもミット・ロムニー元マサチューセッツ州知事が勝利を収めました。ここはひとつ、2012 年のスター候補として期待してみたいところです。「ミスター20%台」は果たして大化けしてくれるかどうか、2つの選挙結果を検証してみたいと思います。

#### ●不透明な 2012 年＝リスクは高い？

毎年恒例、ユーラシアグループの「Top 10 Risks」が発表された<sup>1</sup>。昨年の「Gゼロ」は時代の先端をゆく Buzzword（流行語）となったが、今年も「なるほどね」と感心させられるような項目が並んでいる。

#### ○2012 年の Top 10 Risks

1. The End of the 9/11 Era (9/11 時代の終焉)
2. G-Zero and the Middle East (Gゼロ時代の中東)
3. Eurozone -the muddle is the risk (ユーロ圏—その場しのぎこそがリスク)

---

<sup>1</sup> <http://eurasiagroup.net/pages/top-risks-2012>

4. United States: right after election (アメリカ—選挙のあとが問題)
5. North Korea - implosion or explosion (北朝鮮—内部崩壊か外部暴発か)
6. Pakistan turmoil, spillover (パキスタンの混乱と波及)
7. China - regional tension (中国—域内の緊張関係)
8. Egypt - a transition in trouble (エジプト—政権移行の難航)
9. South Africa - populism ascendant (南アフリカ—ポピュリズムの天下)
10. Venezuela - a no-win election (ベネズエラ—勝者なき選挙)

ただし昨今は、「政治リスク」という言葉自体が一種の流行になってしまい、強調され過ぎているきらいがある。例えば、「今年は選挙が多いからリスクが高い」といった言説をよく耳にする（ひょっとすると本誌がネタ元かもしれない）。しかし、「結果が見えないこと」は、単なる不透明性であってリスクとは別物である。そもそも誰でも知っているような危険は、本来、リスクとは呼ぶべきではないだろう。

ユーラシアグループもそのことを自覚してか、今年は序文で以下のように注意を喚起している。

**皮肉なことに、政治リスクがあまりにも蔓延しているの、その影響がしばしば過大視されるようになっていきます。今年、合計すると世界のGDPの過半を占める国々に政権交代の機会がありますが、米国やフランスの民主的な選挙であれ、中国やロシアの管理された強権主義的な交替劇であれ、今年の政権交代は大したことはありません。加えて、各国の政策決定者たちが重大な難局を迎えているからといって、そうした政府が圧力に負けて瓦解する瀬戸際に立っているわけではありません。**

変化はいつも不透明性を伴うが、それ自体がリスクとは限らないし、もちろんチャンスとなることだってある。選挙で政治家が交代することなどは、本来が素直に結果を楽しめばよいだけの話である。ただし変化が生じる際には「盲点」もつきものであり、「こんなはずではなかった」と後悔することがあるかもしれない。そういう可能性を発見して、事前につぶしておくことがリスク分析である。

2011年は「想定外」の天災が起きてしまったために、日本国内では一種の過剰反応が続いているように思う。端的に言えば、「あれも怖い、これもコワイ」とばかりに、行動を控える風潮が強まっている。しかし「想定外」は、そんなに非難されるべきことではないだろう。あらゆることを想定しようとする、人は何もできなくなってしまう<sup>2</sup>。昨年の本誌（「2011年の国際情勢リスクを読む」、2011年1月14日号）でも指摘したように、「あらゆるリスクを想定してすべてに備えることなど、不可能である以前に不要」であるし、「要は、自分の仕事にとって『他人事でない問題』だけを考えればいい」のである。

---

<sup>2</sup> 東京電力が、津波による福島原発の電源喪失のリスクを見誤っていたことは、「想定外」ではなくて「想定外の誤り」であったと考えるべきであろう（橘川武郎『東京電力失敗の本質』から）。

## ●2012 年米大統領選挙はリスクか？

2012 年の米国大統領選挙も、もちろんそれ自体がリスクなどではない。ユーラシアグループは、米国政治を 2012 年のリスク第 4 位に挙げつつも、以下のように指摘している。

今回の大統領選挙戦が近代米国史で最も醜いものになることは、ほとんど疑いの余地がない。強力な党派的動きは、すでに気まづくなっている米国の政治的空氣をさらに助長することになる。経済が弱含みで推移すること、そしてワシントンが明らかに政治的機能不全に陥っていることは、事態をさらに悪化させることになる。だが、今年のリスクは選挙ではない。政治イデオロギーの両極端から大声は上がるものの、選挙は穏健派および中道派をめぐって行われることになるものと我々は予想している。その理由は、大統領予備選における共和党の大騒動の結果、ミット・ロムニーが同党の候補者となる可能性が高いことにある。

この読みは常識的な線であろう。2013 年 1 月に発足する次期政権においては、対中政策であれ、財政再建策であれ、どのみち政策的な自由度は低い。大統領選挙につきものの、「オバマ再選ならこうなる、ロムニー新政権なら……」式の議論は、今年はさほど重要ではないと見てもいいだろう。

問題は選挙戦が終わった後である。

だがそれも 11 月までで、その後はあやしくなる。長期的な赤字削減の概観はかなりはっきりしているが、短期的には途方もなく大きな不確実性がある。11 月初めの選挙から年末までの 8 週間に、5 兆ドルに相当する租税および歳出削減（ブッシュ大統領時の所得税減税の期限切れ 3.8 兆ドル、自動的削減 1.2 兆ドル）に関する決定を行わなければならない。

（中略）

企業や投資家は解決されるまで手を出さずに脇で待っているか、それともかなり多様な成り行きの可能性に身をさらすかしかない。これは投資家の安心感を損ね、経済成長を押しえることになる。

2011 年末には「給与税減税の延長問題」で米議会は揉めた。クリスマス前日になってようやく 2 か月だけの延長が決まり、2 月 29 日には再び期限が来てしまう。それまでに与野党間で合意ができるかといえば、またまた紆余曲折がありそうである。

しかるに 2012 年末には、「ブッシュ減税の延長問題」というさらに大きな問題が浮上する。11 月 6 日に投票が行なわれ、おそらくは後味の悪い形で結果が出る。議会は共和党が多数を得る公算が高いが、新議会が発足するのは翌年 1 月 3 日からである。そしてレイムダック議会が、この問題に答えを出すことになる。これぞ政治的リスクであろう。

年明け恒例のもうひとつの予測、「バイロン・ウィーンのサプライズ予測」では、第 4 位と第 8 位で米国政治を取り上げている<sup>3</sup>。ユーラシアグループが悲観論なら、サプライズ予測は楽観論の典型で、こんな「ポジティブ・サプライズ」があったら大いに歓迎である。

<sup>3</sup> <http://finance.fortune.cnn.com/2012/01/04/byron-wiens-surprises-of-2012/>

4位：景気の回復と失業率の低下により、オバマ大統領は自分の1期目はそれほど悪くはなかったのだと有権者を説得することができる。冴えない、意見のよく分からないミット・ロムニーに対し、オバマは雄弁だが弱い指導者と見なされることになる。反現職機運が高まって、民主党は下院を取り戻すが上院の多数を失う。

8位：とうとう米議会は、機能不全が両党にとって問題であることに気づく。超党派委員会は向こう10年で1.2兆ドルの予算削減計画を作るのに失敗したが、議会は11月の選挙以前に行動を開始する。防衛および福祉予算、農業補助金が大胆に削減され、石油ガス、不動産などへの税控除が是正される。オバマは、再選されればブッシュ減税を継続すると宣言する。

### ●IA と NH の結果はなぜ一致しないのか？

さて、問題は共和党予備選挙である。

過去の歴史を振り返ってみると、アイオワ（IA）党員集会とニューハンプシャー（NH）州予備選挙の両方を制することは、かなり困難なことである。現行の予備選挙序盤戦が定着したのは1970年代のことだが、「IA と NH の連勝」はなんと1976年のジェラルド・フォードが唯一の例で、今回のロムニー候補はそれ以来の快挙を成し遂げたことになる。

### ○過去の共和党予備選挙の歴史

Year	Iowa caucuses	NH primary	GOP Nominee	President
2012	Romney	Romney	?	?
2008	Mike Huckabee	John McCain	John McCain	Barack Obama
2004	(Not contested)	(Not contested)	Bush Jr.	Bush Jr.
2000	Bush Jr.	John McCain	Bush Jr.	Bush Jr.
1996	Bob Dole	Pat Buchanan	Bob Dole	Bill Clinton
1992	(Not contested)	(Not contested)	Bush Sr.	Bill Clinton
1988	Bob Dole	Bush Sr.	Bush Sr.	Bush Sr.
1984	(Not contested)	(Not contested)	Ronald Reagan	Ronald Reagan
1980	Bush Sr.	Ronald Reagan	Ronald Reagan	Ronald Reagan
1976	Gerald Ford	Gerald Ford	Gerald Ford	Jimmy Carter
1972	(Not contested)	(Not contested)	Richard Nixon	Richard Nixon

なぜそうなるかと言えば、2つの州はまったく性格が違うからだ。アイオワは中西部の農業州であり、保守的な気風で知られている。共和党員として登録しているのは、ボーンアゲインや福音派と呼ばれる人々が多い。従って、ここでは「家族の価値」などの社会問題が重視される。対照的にニューハンプシャー州は、北東部の歴史が古い州であってリベラルな風土がある。こちらの共和党員は経済的保守派が多くなり、「小さな政府」「財政保守主義」などが重要課題となる。

従って過去の共和党は、IA と NH では違う候補者を選んできた。そのどちらが正解であったかと言えば、過去の戦績が示す通り特段の規則性はない。1980 年はレーガンを選んだ NH が正解で、2000 年にはブッシュ Jr.を選んだ IA が当たりであった。1996 年に IA が選んだボブ・ドールはクリントンに返り討ちにあい、2008 年に NH が選んだジョン・マッケインはオバマの前に苦杯をなめている。

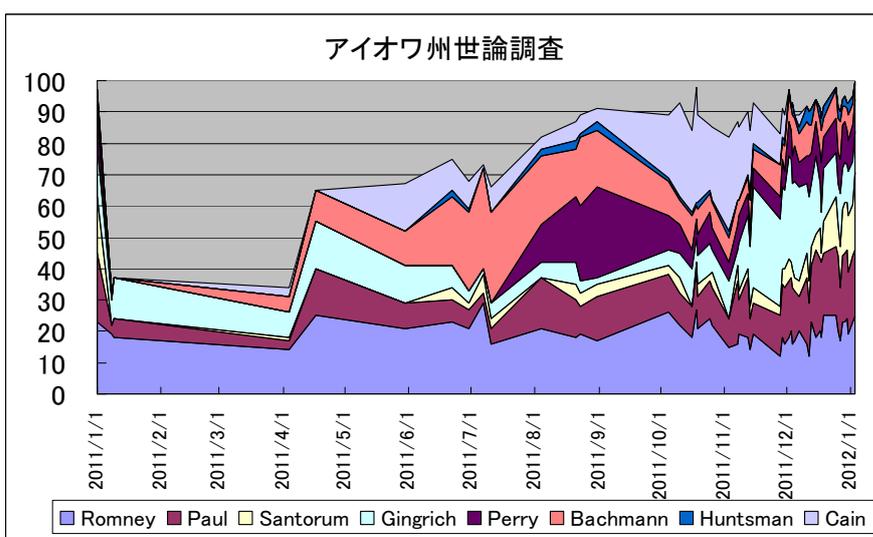
IA は人口 300 万人、NH は 130 万人と、いずれも州のサイズは小さい。この両州が序盤戦の要であることの意味は深い。その気になれば、無名の新人でもあまりお金をかけずに、どちらかの州に「一点賭け」して選挙戦に参入できるのだ。今年はサントラム候補が、IA の 99 カウンティ全部を訪問する「ドブ板選挙」を展開して望外の 2 位を得た。またハンツマン候補は、IA を捨てて NH にかかりきりになって 3 位を得ている。

「IA では番狂わせがある」、「NH では税制論議が注目される」など、土地ごとに積み上げられたストーリーがあって、候補者たちは過去の候補者たちと同じ場所で勝負をし、同じような試練を受ける。メディアや有権者はそれを見て、候補者に対するイメージを形成してゆく。かくして大統領候補を輝かせる「ドラマ」が誕生する。IA や NH での予備選挙には、そういう伝統の力が潜んでいるのである。

## ●ロムニーは強い候補になれるのか？

それでは IA と NH を連勝したロムニーは強い候補者であると言っていいのだろうか。たぶん答えはノーである。

Real Clear Politics が提供しているデータを使い、過去 1 年のアイオワ州における世論調査結果をグラフ化してみた<sup>4</sup>。



<sup>4</sup> [http://www.realeclearpolitics.com/epolls/2012/president/ia/iowa\\_republican\\_presidential\\_primary-1588.html](http://www.realeclearpolitics.com/epolls/2012/president/ia/iowa_republican_presidential_primary-1588.html)

こうして振り返ってみると、昨年夏から年末にかけていかに多くの候補者が浮かんで消えていったかが思い起こされる。最後のサントラムに至っては、「それまで一度も注目されていなかった」ことが理由で脚光を浴びるという不思議な展開であった。

- ① ミシェル・バックマン下院議員（美人候補！）
- ② リック・ペリーTX州知事（偉丈夫でイケメン！）
- ③ ハーマン・ケイン候補（斬新な黒人保守派！）
- ④ ニュート・ギングリッチ元下院議長（討論会に強い！）
- ⑤ リック・サントラム元上院議員（若き社会的保守派！）

この間、ロムニーの支持率は一貫して 20%台をさまよっていた。つまり一度もブレイクできなかったのである。IA での得票も 25%と威張れた数字ではなかった。NH では 39%と大台を超えているが、ロムニーはお隣の州の元知事であり、4 年前にも選挙運動をしているし、州内には別荘も有している。これらの効果による「追い風参考記録」と見た方が良さそう。1月21日に控えている南部サウスカロライナ州で3割を大きく超える得票があったら、その時点で初めて強さは本物ということになる<sup>5</sup>。

極論すれば、今のロムニーは共和黨員の保守派 7 割に嫌われている。党内の保守派は”Anybody But Romney”を模索する過程で、①～⑤の候補者を持ち上げたり降ろしたりしてきたが、この期に及んでロムニーへの対抗馬を絞りきれないでいる。

共和党中央部の論理から言えば、もっとも勝ち目があるのはロムニーであるから、いい加減に党内融和を図った方が得策ということになる。中道派のロムニーならば、オバマの左傾化に嫌気がさしている無党派層も吸収できる可能性がある。さらに言えば、この先の長い予備選挙を勝ち抜けるだけの資金量を確保しているのは、ロムニー陣営だけのはず。だったら他の候補が抵抗を続けて、選挙資金を費消する必然性は乏しいのではないか。

ただし、ティーパーティーなどの新勢力は、「ロムニー候補の下に団結する」ことに抵抗を覚えそうだ。彼らはまた、「党内では仲間の悪口を言わない」というレーガン大統領の教えに忠実ではない。この先も共和党は「学級崩壊」状態が続く恐れがある。

## ●予備選はいつになったら終わるのか？

予備選挙とは党内の議論を収斂させ、候補者を鍛えるためのプロセスでもある。その意味では、今は時間をかけてとことん戦った方が良いのかもしれない。「ブッシュ時代」という負の遺産を抱えた共和党は、今しばらく「自分探しの旅」(Soul Searching Journey)が必要なのではないだろうか。

<sup>5</sup> RCPデータによれば、同州でのロムニー支持は1月12日時点で29.3%とかろうじて3割直前までこぎつけている。  
[http://www.realclearpolitics.com/epolls/2012/president/sc/south\\_carolina\\_republican\\_presidential\\_primary-1590.html](http://www.realclearpolitics.com/epolls/2012/president/sc/south_carolina_republican_presidential_primary-1590.html)

その意味では、以下のような候補者が生き残っていることは、共和党にとってもロムニーにとっても慶賀すべきことであろう。正直なところ、この面々がおとなしく引き下がるとはとても思えず、筆者としてはまだまだ波乱があるように思えてならない。

と同時に、今後の問題はロムニーの候補者としての「伸び代」である。64歳の元経営者は、政治家としてどこまで化けられるか。その辺の検証は次ページ以降で。

**○ロン・ポール下院議員（テキサス州） IA：3位（21%）、NH：2位（23%）**

毎度おなじみの泡沫候補が2012年は手強い。米連銀の解体、金本位制の導入など、政策的にはかなり「トンデモ」なのだが、若者の支持が集まっている模様。「海外からの米軍全面撤退」式の孤立主義が、時節柄支持を集めやすいようだ。「第三政党で出ます」（1988年にも経験済み）と言われると、2000年のラルフ・ネイダーのように共和党の票を割ってしまうかみせぬ、党としては粗略にはできないのが辛いところ。

**○ジョン・ハンツマン前中国大使 IA：7位（1%）、NH：3位（17%）**

IAを捨ててNHに賭けて運動してきたが、ロムニーと同じモルモン教徒ということでキャラがかぶったか、今ひとつ伸びなかった。政策的には筋がいい候補なるも、「オバマ政権で中国大使を務めていた」という「原罪」を抱えているのが弱み。本人は2012年選挙を「みそぎ期間」と割り切っているのかもしれない。ここで負けておけば、2016年に党内でうるさいこと言われぬで済む。それに本人はまだ51歳で「次」がある。

**○ニュート・ギングリッチ元下院議長 IA：4位（13%）、NH：4位（10%）**

大統領候補としては、いよいよこれで終わった感が強い。しかしサウスカロライナ州でロムニー批判を展開し、一太刀浴びせてやろうと手ぐすねを引いている。要はネガティブキャンペーンの報復をしたいのだが、もともとその手の行動が似合う人でもある。

**○リック・サントラム元上院議員 IA：2位（25%）、NH：5位（10%）**

IAで受ける歌は、NHで受ける歌でないことを、身を以て立証した。それでもIAで受ける歌は、サウスカロライナなどの南部諸州でもヒットするかもしれない。資金は少ないけれども、年が若い（53歳）ので、なるべく長く予備選にとどまりたいところ。

**○リック・ペリー知事（テキサス州） IA：5位（10%）、NH：6位（1%）**

IAが終わった瞬間に、「テキサスに帰って今後の方策を考える」と言ったのは、普通に考えれば撤退宣言の婉曲話法。にもかかわらず、後から「サウスカロライナへ行く」と言いだした。間に挟まったNHの共和党员は、当然、冷たい態度（1%）でこれに報いた。この人の政治オンチはかなりの重症。きっと人間的にはとてもいい人なのだろう。

<先月の”The New York Times”紙から>

”At Harvard, a Master’s in Problem Solving”

Jodi Kantor

「ハーバードの問題解決屋」

December 24<sup>th</sup> 2011

\*気づいてみたら、ブッシュもオバマもロムニーもハーバード大修士なんですね。大統領候補になると、若き日の細かなことまで書かれてしまうという好例の記事です。

<要約>

ハーバードビジネススクール (HBS) 卒業後、ロムニーは大学に戻ってワークライフバランスについての講義をしている。「企業経営と同じだよ。自分の資源 (時間や才能) をどう配分するか。子供は 20 年後でないと分からないが、家族を放置しておくといずれ『不良資産』になる」。コンサルタントらしく、家族の価値を利回りで説明したのである。

1971~75 年まで、彼はビジネスと法律を同時にハーバードで学んだ。その時点で彼は著名な企業経営者の息子だったが、自分の才能に不安を抱いていた。それが卒業時には学業でも仕事でも自信満々で、マサチューセッツと金融という 2 つのホームを見出していた。

40 年後、大統領候補になった今も「信念がない」と批判を受けるが、大学時代から彼は政治や思想、論争などから距離を置こうとしていた、とかつての同級生や教授たちは語る。「正しい答えなどない」といつも言っていたし、天性の問題解決屋だと見なされていた。

ビジネススクールでの初講義の日、ロムニーは階段教室で自分の名札を落として皆に見られ、慌てふためいた。当時の教授は、周囲が驚くほど洗練された答えをする学生だったと回想する。彼の父がニクソン政権下の住宅長官であることは教室中が知っていたが、自名家であるようには見えず、「何事にも準備し過ぎる」学生であったという。

4 年かけて法律と経営の両方を選んだのも、成功への保険という意味があった。高卒だった父は法学部進学を望み、本人は HBS を望んだから両方取った、というのが一家のジョークである。初めはミシガンに帰って自動車会社の重役を目指すつもりだった。住宅政策や自動車会社が宿題に出ると、父に相談したこともあった (成果は今一つだったが)。

1 年後輩のブッシュは学内の有名人だったが、ロムニーは社交には関心が薄かった。10 年後に法学部で学んだオバマとも違い、天下国家や政策を論じるタイプではなかった。ベトナム戦争で学内は沸いていたが、政治や社会問題に近寄ることは慎重に避けていた。

代わりに最優等を目指した。HBS 内では皆が勉強会に参加するが、ロムニーはもっともできる生徒を集めた。全員男性のグループで、課題の予習を行うが、手抜きする者がいると全員の成績に影響する。「全優」を目指すロムニーは不真面目な仲間に遠慮がなかった。

HBS では教科書も学説もない。あるのは企業の実態を示す課題だけだ。「この会社はどうなっている? データをどう読む?」で始まる。いきなり患者を見せて医者鍛えるようなものだ。チームは優秀な成績を修め、ロムニーはトップで HBS を卒業した。大学での教育は彼を問題解決者、事実とデータの人とする上で重要な役割を果たしたようだ。

大学時代のロムニーには、すでに妻と2人の子供がいた。未来の知事となる彼は、他の学生とは違ってコーヒーやアルコールを嗜まず、宣誓も喫煙もしなかった。同級生が郊外の自宅を訪ねると、まるで友人の親の家にあがったように感じたという。モルモン教の信仰は大学での成功にも寄与していた。彼はボストン教会の指導者となり、フランスで2年間の布教経験もあったので、リーダーの技量を身につけていた、と信者仲間は語っている。

勉強会仲間を、モルモン教の会合に誘ったこともある。ロムニー夫人は教えに従って、1年分の食糧を地下室に蓄えていたという。ロムニーの付き合い方は、真面目で信頼に足るけれども、オープンではなかった。少なくとも仲間に文句や愚痴は言うことはなかった。

当時、彼の父はニクソン政権内で政敵たちと衝突していた。1972年夏には、母が政権幹部に「夫を低く扱わないで」との直訴状を出している。政治家の子供にはありがちな事件だが、ロムニーは誰にも語っていない。そして時には、「お父さんが大統領とコネがあるなら、そんなに勉強しなくてもいいのに」という仲間の冷やかしを耐えてきた。

逆にビジネスについては多くを語ってきた。1973年には石油ショックで米国経済が停滞していた。だが電卓やコンピュータなどの新技術が登場し、データの解析が楽になった。こうした変化が大きなチャンスをもたらすことを、彼は早くから気づいていたという。

法学部にはさほど熱心ではなかった。「問題を解いて金儲けがしたかったのさ」と元同級生は言う。卒業の1年前、当時できたてのボストンコンサルティングの説明会に出て、「若いうちに最高レベルの問題に取り組める」ことに魅力を感じ、就職することになった。

今日ではロムニーは大学時代について多くを語らない。当時の勉強会仲間とは今も連絡を取り合い、5年ごとに会合を持っている。2002年に五輪大会のトラブルに取り組んだときは、アテネでのIOC総会への出発1時間前まで語りこんだ。まるで昔の「課題」と同じように問題を分析し、年を取った仲間を相手に5つの改善目標を語ったという。

直近の会合は2009年、大統領職への挑戦に失敗した後であった。ロムニーは、「政治に比べればビジネスは簡単だったよ」としみじみ語ったのだそうだ。

## <From the Editor> 若き日のロムニー

上記の記事は、NYT紙の電子版からとったものですが、この中には冒頭に出てくるロムニーが後輩たちに行った講義のノートがPDFファイルで紹介されています。1978年当時のノートが残っている(!)ということに驚いてしまいます。

### ●At Harvard, a Master's in Problem Solving (記事)

[http://www.nytimes.com/2011/12/25/us/politics/how-harvard-shaped-mitt-romney.html?\\_r=3](http://www.nytimes.com/2011/12/25/us/politics/how-harvard-shaped-mitt-romney.html?_r=3)

### ●Notes From Mitt Romney's 1978 Presentation (PDF)

<http://www.nytimes.com/interactive/2011/12/24/us/politics/24romneydocs.html?ref=politics>

マトリクスを描いて、"Stars"、"Cash Cows"、"Wildcats"、"Dogs"の4象限で資源配分を考  
えるというのは、今なら誰もが知っている企業戦略論の基本でしょう。でも、きっとこの  
授業が行なわれた当時には、新鮮な概念だったはず。しかしまあ、それを「家族や信仰」  
の問題に応用するというのは、いくら売れっ子コンサルタントであったにしても、聞いて  
いる側はさぞかし唾然としたことでしょう。

さらに興味深いのは、この話を NYT 紙に語ったのがクレイトン・クリステンセン教授  
であるということです。つまりロムニー氏の後輩で、ハーバードビジネススクールの現・  
花形教授なのです。クリステンセンがこの勉強会の幹事を務め、しかも1978年当時のノー  
トを残してあった。記事にはハッキリとは書いてありませんが、おそらくこの会合は「HBS  
内のモルモン教徒のグループ」だったのでしょう。そうだとすると、この日のテーマにも  
納得が行きます。まことに米国エリート社会の一端を覗かせてくれるようなエピソードで  
はありませんか。

さらに想像をたくましくすると、クリステンセン教授はロムニーのことをあんまり良く  
思っていないようですね。ロムニーがホントに大統領になったら、経済担当補佐官などの  
ポストが回ってきてもおかしくない立場なのに、こんな話をバラしてしまうのですから。  
ちなみ同教授は、家族思いで信仰生活も真面目ということで定評があります。

クリステンセン教授の出世作は『イノベーターのジレンマ』でした。これは先行する優  
良企業が、なぜ新興企業の追いつきに敗れるかという分析でした。仮にロムニーが他の候  
補の追いつきに苦しむようなことがあれば、これぞまさしく「イノベーターのジレンマ」  
の政治版となります。確かに候補者を鍛える意味では、もう少しハラハラさせた方が良い  
ような気がします。だって見ている方も、その方が面白いし。

\*次号は2012年1月27日（金）にお届けします。

編集者敬白

---

本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、双日株式会社および株式会社双日総合研究所の見解  
を示すものではありません。ご要望、問い合わせ等は下記にてお願いします。

〒107-8655 東京都港区赤坂6-1-20 <http://www.sojitz-socket.com/>

双日総合研究所 吉崎達彦 TEL: (03) 5520-2195 FAX: (03) 5520-4945

E-MAIL: [yoshizaki.tatsuhiko@sea.sojitz.com](mailto:yoshizaki.tatsuhiko@sea.sojitz.com)